



いのちと平和と子どもたち

こでまた ぶうね

2021.11.27
No.30-13

川口ぞうれっしゃ合唱団

真っ青な空に、くじら雲、その脇に白波のような縞雲、上空にはうろこ雲が浮かんでいて、まるで雲の見本市のようでした。小春日和の昼下がり、公園で遊ぶ子どもたちを見ていると、空という言葉を感じたばかりの娘が「みて！おそらがいっぱい！」と叫んだ日のことを思い出しました。願いは、この美しい空を未来の子どもたちにちゃんと手渡すこと、ただそれだけです。

「とにかく戦争はいけません。どんな美辞麗句をつけても、戦争は集団人殺しです。」と平和の尊さを訴え続けた、作家で僧侶の瀬戸内寂聴さんが、99歳で亡くなりました。『煩惱の作家』と呼ばれた前半生を断ち切り51歳で出家してからは、執筆活動のかたわら、豊富な人生経験から紡ぎ出す深い言葉で、法話や人生相談、講演活動に精力的に取り組みました。晩年は、『^{もろこりた}忘己利他』の教えの下、被災者支援や平和活動、原発反対運動にも力を注ぎ、憲法集会や国会前スピーチ、時にはハンガーストライキ、雨の中の座り込みなど、文字通り命がけて、「若い世代が希望を持てる未来」のため戦い続けました。

ご本人の希望で、墓碑には「愛した 書いた 祈った」と刻まれるそうです。心からご冥福をお祈りします。

さて今回は、♪た〜いこ 敲いて 笛吹いて ♪舞台、客席も狭しと踊りまわる民族歌舞団『荒馬座』の代表、金子さんです。

私たちは、日本のお祭りの中で昔から育まれてきた太鼓や踊りを舞台上で上演している、民族歌舞団荒馬座です。おかげさまで9月16日に創立55周年を迎えました。



『川口ぞうれっしゃ』のみなさんとは、1999年、第5回コンサートの時に初めて出会いました。下は2歳位から上は70代以上の方まで、老若男女問わず、みんなが思いを一つに、願いを込めて歌い上げる人間の声のパワーに圧倒され感動したこと。また、スタッフのみなさまの行き届いた働き振りや、出演者の思いに寄り添った、一つの舞台を作り上げるための的確なアドバイスがとても印象的で、大変学ばされたことなど、あの時の出会いと学びが私たちの舞台作りの原点として生かされ、引き継がれています。

あの日の出会いからもうすぐ25年。そして、第1回目のコンサートから思いをつないで、30周年という節目を迎えられたのです。その記念のコンサートがコロナ禍のために開催できなかったことは、とても残念です。

荒馬座も、昨年からのコロナ禍で公演活動中止が相次ぎ、存続の危機に立たされましたが、多くの方々からのご支援を頂き、何とか持ちこたえて公演活動を継続しています。みなさんも、「集まらない」「歌えない」苦しい日々を乗り越えながら、再会を心待ちにしていることでしょう。

日本の太鼓や踊りは多くの自然災害等を乗り越え、時代を超え受け継がれてきました。疫病退散、無病息災、家内安全、世界平和…まさに今、私たちが心の底から切実に願っている思いを込めて演じられてきたのが民族芸能でした。心を揺さぶるぞうれっしゃの歌と民族芸能とのコラボレーションで、「命の大切さ」や「生きる喜び」、そして歌い、踊り、叩くことは、人間の営みにとって不要ではなく、必要なんだ！ということを発信する舞台を共につくられたら最高ですね。

3月にお会いできるのを楽しみにしています！



荒馬座代表 金子 満里